慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	絶望からの出発 A Cool Millionに見るNathanael Westの政治観と戦略
Sub Title	One tep away from desperation : The politics in nathanael west's A Cool Million
Author	村上, 東(Murakami, Akira)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1991
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.59, (1991. 3) ,p.370(71)- 384(57)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大濱甫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00590001-0384

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

絶望からの出発
A Cool Million に見る Nathanael West の政治観と戦略

村　上　　東

Nathanael West が残した四篇の小説は，どの作品も短かいものであるが，内容は盛り沢山である。散漫な印象を与えることが少ない第二作 *Miss Lonelyhearts* と第四作 *The Day of the Locust* のみが通例傑作とされるのは，一応のまとまりが容易に見通せるためである。しかし，キリスト教に拠る救済の問題を中心に据えた *Miss Lonelyhearts* も，メスの入れ方次第では，個人の幸福の問題，他者との関係，知識人と大衆，社会に対する芸術の意味，等々といった様々な切り口を見せる[1]。*The Day of the Locust* もやはり多様な問題を扱っている。とはいえ，1930年代の末世的なアメリカ社会の象徴としてハリウッドを描くという大枠は理解しやすいため，評価が高いのである。以上二作とは正反対に，第一作 *The Dream Life of Balso Snell* と，私が本稿で取りあげる第三作 *A Cool Million* は焦点の定まらぬ，よく言っても総花的な作品だと考えられ勝ちである。

一篇の作品に盛りこまれる諸問題をひとつひとつの短篇に分け，整然とまとめる能力が West になかったのだ，と断言されても，否定し切ることはできなかろう。しかし，多くの問題を一篇のなかで語る（いや，語らねばいられなかった）West の特質は検討されなければならないし，一見脱線と思えるような別々の問題の提示に有機的な関連があるのならば，その点も明らかにされなければならない。私は，これまでの批評などを参考にしながら，以上の視点で *A Cool Million* を読み直してみたいのである。

この小説は，アメリカ成功の夢を盲信する元大統領が，同郷の青年を従え，合衆国にファシスト政権を樹立するまでの物語であると同時に，その青年がアメリカ社会の悪夢的な暴力によって不具となり，結局は殺されるという笑えぬ喜劇である。その過程で，農村対都市，人種問題，'30年代の大不況，アメリカ西部への夢といった問題が，さながらアメリカ合衆国の歴史を走馬燈で見るように作品に織りこまれてゆく。アメリカの夢批判に着目する研究者は文体と前半部の筋立てに顕著な Horatio Alger 諸作品のパロディを論じてゆくし[2]，反ファシズム小説という側面を重視する論者は *A Cool Million* の先駆性を強調するが[3]，私は，まず，後者の問題から見てゆきたい。

この小説に遅れをとること一年，Sinclair Lewis の *It Can't Happen Here*（1935）が刊行され，リベラリストの間で高い評価を受ける[4]。*A Cool Million* と同様，合衆国にファシスト政権が誕生する様子を描いたものだが，ニュー・ディール路線を守ろうとする人物も登場し，選挙を前にして Roosevelt 政権を脅す保守的／ファシスト的な勢力の動向に気遣う読者が共鳴できる内容となっている。また，リアリズム小説としての完成度も決して低いとは言えず，Lewis の政治的良心が無理なく理解されたことも不思議ではない。この小説が持つ，West 作品との一番大きな相違点は，作品のなかにも敵（ファシズム）と味方（リベラリズム）が描かれ，現実のアメリカ社会にも作品内の敵対関係とほぼ同じものが存在したことである。ただ，小説（虚構）のなかで現実が派手に演出されていたに過ぎない。そして，敵に矢を放ったがゆえに Lewis は味方から拍手を受けたのである。

一方，*A Cool Million* には，敵（ファシズム）が描かれていても，味方らしき存在は出て来ない。登場人物のなかに，まともな社会主義者，組合運動家，そして，リベラリストらしき人間すら見当たらない。さらに重要なことには，味方を生む地盤であるべきところのアメリカ合衆国国民が，国際的ユダヤ資本とソ連のスパイによる度重なる妨害にもめげず，ファシスト政権を成立させるのである。言い換えれば，汝の敵は汝の内にあると

いう筋立てであり，合衆国国民，そして人類全体への風刺と警鐘になっている。しかし，実際に自分が敵（ファシズム）と戦っていると思っていた人間にとっては，これは，腹立たしくとも決して面白い話ではない。

A Cool Million に対しては，出版後すぐ，数篇の書評が発表されており，なかには好意的なものもあった。しかし，ほとんど無視され売れ行きも非常に悪かった理由については，Daniel Aaron の "Late Thoughts on Nathanael West" で指摘されているように，「全人類を風刺してしまう作家」だったことが大きな要因と考えられる[5]。全人類が笑いの対象となれば，つまり，全人類が馬鹿だとなれば，未来を創る人間も歴史的必然で行動する人間も無意味な存在となるわけで，プロレタリア文学，社会主義リアリズムの時代には受け入れられ難い作風だったと言えよう。従って，作者 West の友人にラディカリストであった人間が多くとも，この小説が評価されなかったのは当然である。

Daniel Aaron の指摘について私が付け加えたいのは，合衆国のファシズム化という筋立てが，この作品の重要な側面であれ，この作品で示される他の問題をも包みこむ作者自身の悲観主義を読者に強く印象付ける装置だ，とも考えられる点である。政治小説，あるいは政治問題を風刺する小説にはつきものの政治の描写は，妙に思える程少ない。国家革命党の運動が軌道に乗り，合衆国にファシスト政権が誕生するまでの過程は，全31章中，最後の3章に描かれるのみで，それ以前の28章のほとんどでは，およそ政治小説とは呼び難いエピソードが整合性のないコラージュのように結びつけられている。

Lewis の *It Can't Happen Here* にせよ，George Orwell の *Animal Farm* にせよ，全体主義（ファシズムもスターリニズムも，旗の色柄こそ違え，ともに全体主義である）の成立を緻密に作品化している。別の言い方をすれば，全体主義という政治問題がなければ書かれなかった作品だと言ってよかろう。これらの純然たる政治小説とは異なり，*A Cool Million* のファシズム描写は作品の終わり近くにならなければ出て来ない。Whipple 元民主党大統領が南部の田舎町で合衆国讃美の演説をし，暴動と

も騒乱とも呼べる事件が起きる。それを背景に，ムッソリーニのローマ進軍よろしく，中西部へ，そして東部へと勢力を拡大し，政権獲得に至る。しかし，南部の田舎町で起きた騒乱の最中，語り手に主人公と呼ばれている青年 Lemuel は Whipple 元大統領とはぐれてしまい，その後の政治情勢の推移は，この青年 Lemuel が新聞の見出しで読むという形で読者に示されるのみである。田舎町で騒乱を誘発させた Whipple の演説も，合衆国讃美に終始し，ファシズムの軍事的，経済的な展望を説明してはいない。第29章以前に Whipple が Lemuel に自分のアメリカ的ファシスト哲学を解説する場面が出て来るとはいえ，これもお粗末なものである。ロックフェラーやフォードといった素晴らしい資本家を生んだアメリカの夢を守るには，ユダヤ系資本と共産主義／組合運動といった外圧からアメリカ合衆国を守らなければならない，と元大統領 Whipple は言うのみである。ヒットラーの演説や『我が闘争』と較べてしまえば，小学生向けの軍歌程度の代物としか呼びようがない。

田舎町における騒乱の描写も　政治小説らしさを欠く。Whipple の演説を聞いた群集は熱狂し，血の祝祭的な暴力事件を次々と起こすが，政治的に動くことがないのである。黒人住民やユダヤ人セールスマンが殺され，カトリック神父宅の女中が強姦されたことが描かれても，大衆の愚かさが浮き彫りにされただけであり，ファシズムの恐ろしさを描いているとは言い難い。ファシズムの恐怖を描くとすれば，以下のような描写も面白かろう。Whipple 率る国家革命党の政権樹立後，合衆国では，ユダヤ人を含め全ての有色人種は強制収容所送り，あるいはアラスカ送りとなり，非 WASP 系の白人も公職追放，共産党員や組合運動の指導者は即時逮捕処刑，Mark Twain や Theodore Dreiser は発禁焚書。このようなところまで書いたなら政治小説らしさも濃厚になっていた筈である。しかしながら，*A Cool Million* には，その手の描写がほとんどない。

West がこの小説執筆当時，合衆国の右傾化は，ラディカル陣営並びにリベラリストの間で強く懸念されていたわけで，正面からファシズムに取り組んで本を書く必要性をこの期に及んでまで West が感じていなかっ

た，と推測することもできよう。合衆国にファシスト政権誕生という落ちをつけるだけでも充分面白味が出せる，と West が考えていたのではないか，ということである。ともあれ，Lewis やClifford Odets (*Till the Day I Die*) よりも一年早い1934年の作品だという事実は軽視し難い。

Alan Ross に代表される，Whipple を主たる悪役と見る読み方には，いささか難があると思われる[6)]。Whipple にヒットラーのごときカリスマ性があり，ヒットラーの演説（その全てではないにせよ）に力強く呼応する政治的爆発力のようなものが大衆の側にあったことを窺わせる描写が表面に出ていれば，Whipple = Hitler 論に反論の余地は狭かろう。作品のなかで Whipple の抱くファシズム論に耳を傾けるのは Lemuel ひとりである。その Lemuel ですら，話を聞いたその場で一応納得するが，いや，納得というよりは尊敬している人物の話に圧倒されているのみと言うべきであろう。その証拠に，Lemuel は Whipple 流ファシズムを他者に説明できるようになるまで成長しないのである。Whipple 政権樹立を助ける他の連中に関しても，自分の不平不満の捌け口を Whipple の運動に見い出しているだけであり，Whipple の政治思想を充分に理解している場面は見当たらないし，また，Whipple 勢力に油を注ぐこととなる騒乱も，Whipple が登場する以前に騒乱参加者が持っていた不満に煙草の火が落ちた結果としか読み取れないように作品は書かれている。つまり，ヒットラーというひとりの政治家と大衆の密月が政治＝軍事思想，民族主義，宗教などといった固い絆で生まれたものであるのに対し，Whipple 勢力における政治家と大衆とは，両者の本質的な結びつきなど持たず，大不況時代の社会不安を除けば，必然をはるかに上回る偶然を重ね合衆国をファシズム化するのである。政治活動の積み重ねなしに，いきなりファシスト政権誕生なのである。言い換えれば，政治家がその思想をもって大衆を組織できること，知識人は大衆を啓蒙できることといった近現代政治運動の理念及び社会主義運動の基本と呼んで差しつかえない発想に対する風刺（不信の表明）が，この *A Cool Million* に書かれている，としか考えられない。

私が今主張したことを裏付ける証拠が作品の至るところにある。共産主

義者の手先は，オルグなどせず，暗殺と破壊活動専従のロボットとしてのみ登場する。これは左翼に対する風刺だが，政治全体を風刺するためには，左翼に対しても公平を期するのが当然であろう。また，現実の文学者は Ezra Pound にも Michael Gold にもなる可能性を持つが，この作品に登場する詩人 Snodgrasse は，「自分の『詩』を買ってもらうだけの能力がない」[7]，つまり大衆に理解されないがゆえに大衆を憎み，悪徳と八つ当たりを重ねる。ここにも，知識人と大衆との溝がある。

アメリカン・インディアンの酋長が指導した対白人文化の蜂起（第26章）が最も象徴的であり，いささか詳しく述べる必要があろう。酋長 Israel Satinpenny の演説には，少数民族自立の問題と環境問題が明確に打ち出されている。高度に知的であり，少数民族問題についての部分は，白人中心文化批判に基くもので，レーニンの四月テーゼから毛沢東／カストロの第三世界革命論に続く流れを連想させられてしまう。また，環境問題についての部分も，'60年代後半以降の様々な運動が掲げた主張から遠いものではない。

> "When the paleface controlled the things he manufactured, we red men could only wonder at and praise his ability to hide his vomit. But now all the secret places of the earth are full. Now even the Grand Canyon will no longer hold his razor blades. Now the dam, O warriors, has broken and he is up to his neck in the articles of his manufacture. [8]

このように説明しつつ，昔の美しき大地が戻らぬまでも白人文化から力で独立せよ，と言う。しかし，酋長の戦略的結論は，時計こそ白人進歩史観を機能させているというものであり，部下たちに「時計を壊せ」と命ずるのであった[9]。一行もかからずに比喩表現が，具体物への呪術的な攻撃へと変化してしまう。これだけでも戯画的なのだが，さらに哀れな落ちがついている。酋長の演説を聞いたインディアン大衆のあげた唯一の戦果らし

きものは，偶然近くにキャンプしていた Lemuel の頭の皮なのであった。知識人／政治家である酋長が道化であれば，大衆も愚民である。もう，「右も左も蹴っとばせ！」どころの騒ぎでは，ない[10]。政治活動家や知識人にも，大衆にも信を置かず，という態度表明と受け取るべきであろう。ここが *A Cool Million* の凄みであり，讃辞を呈するとすれば，吉本隆明の「もつと深く絶望せよ」こそが，ふさわしい[11]。少なくとも私は，他に誉め言葉を知らない。

1957年の Farrar, Straus 版全作品集刊行に続く West 再評価の大波のなかにも，この作品さえ評価する書評，論文がないわけではない。しかし，Norman Podhoretz の書評などは，*Miss Lonelyhearts* や *The Day of the Locust* について深い洞察を示しつつ誉めちぎるのだが，*A Cool Million* は無視している[12]。こうした Podhoretz の態度は当時の *A Cool Million* 評価を代表するものと言えよう。また，West を扱う批評書，研究書はほとんどが生前に単行本となった四篇の小説（現在でも，草稿，雑文，詩，映画の台本等はまとめて出版されていない）を取りあげる体裁になるとはいえ，*A Cool Million* に割かれる頁数は悲しい程に少ない。

1971年に批評史における転機が訪れた。T. R. Steiner が，一見取り留めのない粗筋を持つこの小説に『聖書』，殊に『旧約聖書』を使った下部構造があることを指摘したのである[13]。読者に雑然とした印象を与えかねない作品が，出来映えはともかくも，一枚の青写真のもとに書かれたであろう点を例証した Steiner の読みは無視できない。本論では，Steiner 論文のなかでも私が特に重要と考える部分を紹介したい。

大衆の盲目の力，大恐慌時代のアメリカに訪れかねなかったファシズムの嵐といった社会的，政治的な内容以上に，そうした危機的事態の到来を容易にする大衆の想像力こそが *A Cool Million* の主人公と呼ぶに価することを Steiner はまず指摘する。それゆえ，West はいつもの知的な文体や語法を多くは用いず，大衆の想像力そのものである Horatio Alger の文体を借用したわけである。そして，『聖書』，主に『旧約聖書』やヘブライ語

から取った first names が，人種，民族の別なく，登場人物に振り当てられており，この悪戯的手法に拠って『旧約聖書』に描かれているユダヤ民族の夢と悲劇が垣間見られ，'30年代アメリカの危機と二重写しになる，と Steiner は主張する。インディアンの酋長は "Israel" であり，Whipple の first name は "Nathan" である。また，主人公 Lemuel の母は "Sarah" であり，Lemuel の精神的父である Whipple は "Abraham Lincoln" を自分と同一視している。こうなれば，Lemuel は神（作品においては，アメリカの夢と悪夢である）への捧げ物と考えられよう。Lemuel には，キリストのイメージを重ね合わせた描写もあり，ますますアメリカ大衆の想像力に供された生贄らしさを帯びる。そうした工夫が成功しているか否かは別として，*A Cool Million* が重層的であることを Steiner は明示してくれたのである。Steiner 論文の後半はユダヤ系アメリカ人第二世代の話へと展開してゆくのだが，今紹介した，作品に即した議論である前半部からは私は多くのものを教えられた。

Joyce - Eliot 流の下敷き遊び（神話的手法）は第二作*Miss Lonelyhearts* にも見受けられる。"Miss Lonelyhearts and Mrs. Shrike" の章で，主人公は上司の妻 "Mary" を誘惑する[14]。二十世紀アメリカ合衆国のキリスト様との渾名を持つ主人公が，こともあろうに，マリア様を口説くのである。展開はもちろんのこと下部構造に規定され，主人公積年の下心も必死の努力も，父親（つまり，上司）の登場で水の泡となり，主人公はエディプスになれない。*Miss Lonelyhearts* 刊行に際し，West は，新作についての弁明とも，文壇に対する挑戦状とも取れる以下のような文章を発表している。

> Psychology has nothing to do with reality nor should it be used as motivation. The novelist is no longer a psychologist. Psychology can become something much more important. The great body of case histories can be used in the way the ancient writers used their myths. Freud is your Bulfinch; you can not learn from him. [15]

West が *Miss Lonelyhearts* を書いた時，主として下敷きにしたものは William James と Edwin Diller Starbuck の心理学書であったらしく，その種明かしをしているのだが，問題となるのは，“the ancient writers” という言葉である。「古代の作家」とも「年寄りの作家」とも解釈できるが，両方の含みを読み取っておくべきであろう。つまり，「年寄りの作家」とは Joyce や Eliot を指すと考えられるし，心理学以外の下敷きが隠されていても驚くにあたらない。“Miss Lonelyhearts and Mrs. Shrike” の章で用いた『新約聖書』を下敷きとする神話的手法を，West は *A Cool Million* で大々的に使ったのである。この点について Steiner 論文に言及はないが，West の神話的手法を重視する私にとって心強い味方である[16)]。

反ファシズム小説という側面以外にも，*A Cool Million* には，斜め読みしただけでも判る特色がある。Horatio Alger の描き続けた成功の夢を徹底的に風刺していることである。ファシズムの問題を見てゆく時は Whipple 元大統領を中心に議論を進めてゆけばよかったが，今度は，彼と同じ Vermont 州の田舎町に生まれ育った十七歳の若者 Lemuel と彼が「子供っぽい恋心を抱く」相手 Betty の運命を辿ってゆかねばならない。Lemuel は母とふたりきりで独立戦争当時から建てかえられていないボロ家に住んでいる。おまけに，この家は抵当に入っており，弁護士がやって来て抵当権行使を予告してゆく。困った Lemuel は，町一番の名士にして銀行の経営者，そして以前は合衆国大統領でもあった Nathan Whipple 氏に金を借りに行くが断られる。そのかわり，アメリカの成功の夢について説教をされ，大都会へ出て自分の力で富を築く決意を固める。勇んで故郷の町をあとにした Lemuel は，New York へ向かう汽車のなかでスリと詐欺に遭ったうえ，警官には犯人として逮捕されてしまう。Lemuel は無実の罪で15年の刑を受けるが，選挙前の点数稼ぎに地方検事が仕組んだデッチアゲ裁判であった。州立刑務所の所長は，〈犯罪は病気に過ぎない。歯がなければ伝染病にもかからん〉という信念の持ち主であり，Lemuel の歯

を全て抜かせてしまう。このようにして，Lemuel は，Horatio Alger 物語的な成功のかけらすら手に入れることができないばかりか，*A Cool Million* の副題，「Lemuel Pitkin の解体」が予告する通り，様々な暴力や不正を経験するうちに，全ての歯，右目，頭の皮，片足，そして最後には命までも失ってゆく運命にある。と同時に，善意，財力，権力を持った人物とはすれ違いをするか，利用して捨てられるだけである。「相手役」と称される Betty の運命も Lemuel と大差なく，まず強姦され，人買いの手によって売春宿に売られ，運よく逃げ出せたものの他に仕事がなく街の女となる。

歯と右目を失い，二度の監獄暮らしを終えた Lemuel は，第21章で Betty と再開する。お互いの変わり果てた姿を見てふたりとも驚くわけであるが，この章までHoratio Alger の露骨なパロディが，文体と語法の借用（盗用）と偶発的な事件の連続という形で，食傷する程に出てくる。Horatio Alger の描く成功の夢に対する批判だけならば，その夢から覚めるひとりの青年を描くなり，その夢と心中する青年の惨めな姿を描けば済む。また，第21章の結末として Lemuel と Betty が交通事故にでも遭えば，出来映えはともかくとして，アメリカの夢批判を主題とした小説が一篇完成する[17]。ところが，この小説では，Lemuel と Betty が元大統領 Whipple と the Grand Central Station で再開し，ファシスト政権が生まれるまで話が続いてゆく。とはいえ，反ファシズム問題とアメリカの夢批判とを強引に結びつけたと解釈してしまうよりも，Steiner 説に従うべきであろう。つまり，アメリカの神話／大衆の夢と想像力を真の悪役と捉えることで，私はこの作品をさらに深く読みたいのである。

日本人の national identity を体現する（と思われている）人物が天皇であるように，合衆国の national identity を体現する（と思われている）人物は大統領である。合衆国の元大統領 Whipple がファシズムを成就させるところをこの小説の特徴のひとつとして挙げなければならない。大統領は合衆国の理想，英知，希望の象徴であると子供たちは教わるのである。元大統領が合衆国ファシズム化という勝利を手にし，他の登場人物が死や死

よりも残酷な不幸しか経験しないことは私たち読者に何かを教えている。政治家／知識人／芸術家と大衆が協調してゆける，手に手を取りあってゆけるという発想を West が皮肉っていることは既に述べた。そうした上に立つ人間たちが道化として描かれているのだが，知性では秀でている酋長 Satinpenny と詩人 Snodgrasse は目的を果たせず，悪夢を約束する夢のみを口走る元大統領ひとりが勝ち残るのである。大衆を不幸の奈落に残したまま，大衆の夢だけが勝ち残ったのだ，と言い換えられよう。そして，それが合衆国の national identity なのである。Whipple の台詞は，それがアメリカ大衆の夢／神話そのものであるがゆえに，大衆の頭のなかにある時から既に大衆とは縁遠いのであり，その時から既に大衆を裏切っている。ヒットラーの持っていた悪魔の魅力と人間臭さについては，かの George Orwell も述べているが[18]，Whipple にヒットラー的なものが欠けているのは，彼が大衆の夢／神話を連呼するテープ・リコーダーに過ぎないからである。Whipple 主義を理解せずとも国家革命党に追従する人間が数を増してゆくのも，大衆が自分たちの抱く夢／神話に対して無反省であることの喩に他ならない。

本論の冒頭で *A Cool Million* が散漫な印象を与えるとも述べたが，上に立つ人間たちへの不信と大衆不信の立場は一貫していると認められる。しかし，大衆不信といっても，大衆嫌悪や大衆蔑視とは異なる。突飛な事件が連続するが，そのひとつひとつが大衆の夢潰し，アメリカの神話叩きとなっており，その背後には，慈善運動家や社会主義者と同じ大衆救済を願う煩悩を持った作者の姿がはっきり見えている。この作品の一年前に刊行された *Miss Lonelyhearts* の主人公も，全人類の救済という見果てぬ夢を抱いていたではないか。

合衆国が建国以来産み出し成長させてきた神話としては，まず自由と平等が頭に浮かぶ。このふたつにピューリタン的労働観と資本主義を付け加えれば，出てくるものは自由競争とアメリカ成功の夢である。しかし，自由と平等という大義名分のもとに成立した自由競争は，当然のことながら，敗者を作り続ける。また，*Miss Lonelyhearts* の主人公に手紙を書き

送った人間たちのように，端から競争に参加できない弱者もいる。そこでこの作家は，建国以来の錦の御旗である自由と平等の理念を攻撃することで，*A Cool Million* の幕を開けるのである。読者は冒頭で，Lemuel の家が植民地時代の建物であること，Lemuel の祖先が数人独立戦争に参加していたことを知らされる。そして，Vermont 州の田舎町とくれば，建国以来の理念が冷凍保存されているかも知れない，と読者に期待を抱かせる。しかし，実情は正反対で，この田舎町さえ弱肉強食のジャングルであることが，頁をめくるごとに判ってくる。こうして West は，悪しき大都会と美しき農村という幻想の垣根を壊し，自由平等の理念には陰と刺とがあることを示す。アメリカ成功の夢に対して ambivalent であった作家，いや，その点が売り物であった作家は多いのだが，作品を読む限り，この作家にそうした ambivalence は全く見られない。

そして，登場人物中数少ない無垢で無知な田舎者 Lemuel に Whipple 元大統領がアメリカの夢を植えつけると，この弱肉強食劇場は目まぐるしく展開し始める。林のなかでの喧嘩，列車内での三件の犯罪，刑務所，大都会と次々に舞台背景をかえながら，作者は徹底的に Lemuel を痛めつけるが，作者の本当の攻撃目標は，Lemuel が象徴するところの，かつてアメリカはこうであったという幻想，かつて農村は美しかったという幻想である。アメリカ成功の夢を攻撃しているのだ，と言って問題を片付けてしまっては，West が浮かばれない。彼は，成功の夢を生む地盤はもちろんのこと，いまだに合衆国の魅力であるところの理念を，歴史を遡って，裁き切りたいのである。

三度目に舞台に出る時，Whipple はファシストになっている。Lemuel は Whipple に従うが，また多くのドタバタ的な紆余曲折が読者を待っており，小説に政治的なものを期待する人間は，はぐらかされてしまう。いわゆる intentional fallacy の危険を承知で言えば，素人漫画以上に馬鹿馬鹿しく笑えもしない事件をわざと次々繰り出すのも，ひとつの戦略ではなかったか，と思えないこともない。小説が現実味を失い，登場人物たちが人格を失うにつれて，本当の主人公であるところの，大衆の想像力と夢／

アメリカの神話，そして，それらを育んだ合衆国の歴史が浮かびあがってくるからである。これこそが West の意図であったか否かはともかく，*A Cool Million* に対する理想の読者になるための読み方なのだ，とは言えよう。

第22章で主要なる登場人物たちは，カリフォルニアへ金を掘りに出掛ける。当然のことながら，アメリカの夢が西漸性を持っていたことへの風刺であり，これまた当然のことながら，西部劇の典型的な悪漢が登場する。その悪漢の仕業が導火線となって，前述のインディアン蜂起が，火がついただけで，爆発しそこねる。インディアンのほとんどは弱者であり，アメリカ史の陰の部分に生き死にしてきたわけで，この小説に登場する権利はある。他にも，少なからず弱者が登場し，作品を重苦しいものにする。例えば，第28章の劇中劇に出てくる貧乏な老婆と三人の孫息子たちである。彼女等は，インチキ債券会社の押し売り営業マンに騙されたうえ，野垂れ死にをする。続く第29章において Whipple がこの劇中劇について意見を述べるが，私には注目すべき箇所と思われる。

> "In the first place," Mr. Whipple said, in reply to Lem's questions, "the grandmother didn't have to buy the bonds unless she wanted to. Secondly, the whole piece is made ridiculous by the fact that no one can die in the streets. The authorities won't stand for it."[19]

自由とは敗者になる自由であり，平等と福祉は死んだ時に初めてやって来る。これこそ，*A Cool Million* の教訓と言うべきであろう。

このあとの粗筋については，反ファシズム問題のところで触れたので，繰り返さない。繰り返したいことは，ひとつ。アメリカの神話／大衆の夢と想像力が，弱者を端から相手にせず，敗者の存在を前提とする以上，*A Cool Million* に塗りこめられた批判は有効であり，愚作として放っておけぬ質の高さを持っている，ということである。この小説で笑えぬ読者も多

かろうが，仕方あるまい。笑えぬ程に深刻な問題が扱われているからである。

West の作品をプロレタリア文学と見做さない研究者は少なくない[20]。しかし，プロレタリア文学者以外で，West 程に大衆の問題を重視し，懲りもせず小説を書き続けた作家は珍しかろう。West は絶望の文学者と呼ばれることもある。極度の悲観主義者という意味ならば，私も賛成する。とはいえ，絶望し切った人間は，他人様（大衆）を気遣って，小説を書いたりはしない。自殺も含めて他にいくらでも，気軽で楽しい絶望の仕方はある。West は，絶望から出発しようとしたのである。ともかくも第一歩を踏み出そうとしたのだ，と私は考えている。

〔付記〕本稿は1989年10月21日第28回日本アメリカ文学会全国大会（於岡山大学）における口頭発表を改稿したものである。

注

1） 詳しくは拙稿，「ナサニエル・ウェストとアメリカ文学（草稿）」*Colloquia*, no. 1（東京：慶應義塾大学大学院英米文学科 Collquia 同人, 1980), pp. 1 20. を参照していただきたい。

2） 以下の論文を参照。
Douglas H. Shepard, "Nathanael West Rewrites Horatio Alger, Jr.," (the) *Satire Newsletter*, 3, no.1 (Fall 1965), pp.13 28.
Gary Scharnhorst, "From Rag to Patches, or *A Cool Million* as Alter Alger," (the) *Ball State University Forum*, 21, no. 4 (1980), pp. 58 65.

3） この流れの代表的な研究者としては，R. W. B. Lewis の名を挙げるべきであろう。

4） *It Can't Happen Here* の受容等については，斎藤光（編）『シンクレア・ルイス』〈20世紀英米文学案内，第13巻〉（東京：研究社，1968）を参照させていただいた。

5） *The Massachusetts Review*, 6, no.2 (Winter Spring, 1965), pp.307 317. Reprinted in *Nathanael West: A Collection of Critical Essays*, ed. by Jay Martin (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall, 1971), pp. 161 69.

6） "The Dead Center: An Introduction to Nathanael West" in *The Complete Works of Nathanael West* (New York: Farrar, Straus and Cudahy, 1957),

pp. vii xxii.

7) *The Complete Works* , p. 238.

8) *Ibid.*, pp. 232 33.

9) *Ibid.*, p. 233.

10) 野坂昭如の名言にして，彼の時評集（文芸春秋社刊）の題名である。

11) 『異端と正系』（東京：現代思潮社，1960），pp. 282 93. West が経験した党／文壇／大衆からの孤立と同じものを，吉本は「自立」と呼んだのだ，と私は解釈している。

12) "Nathanael West: A Particular Kind of Joking" in *Doings and Undoings: The Fifties and After in American Writing* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1964), pp. 66 75. First Published in the *New Yorker* (1957).

13) "West's Lemuel and the American Dream," *The Southern Review*, 7, no. 4(October 1971), pp. 994 1006. Reprinted in *Nathanael West: The Cheaters and the Cheated*, ed. by David Madden (Deland. Florida: Everett/Edwards, 1972), pp. 157 70. 1985年に概説書を出した Robert Emmet Long も Steiner の読みを踏襲している。

14) *The Complete Works*, pp.88 96.

15) "Some Notes on Miss L." in the *Contempo*, 3, no.9 (May 15, 1933), pp. 1 2. Reprinted in *Nathanael West: A Collection of Critical Essays*, ed. by Jay Martin, pp. 66 67.

16) *Miss Lonelyhearts* の分析については，前掲の拙稿を参照していただきたい。

17) 金持ちが乗っている大型車に轢かれる，といった幕切れが面白かろう。

18) "Review of *Mein Kampf* by Adolf Hitler" in *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell, Vol. 2: My Country Right or Left, 1940 1943*
(Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books Ltd., 1970), pp. 27 29. First published in the *New English Weekly*, (March 21, 1940).

19) *The Complete Works*, p. 242.

20) 例えば，Walter B. Rideout だが，線を引かれてしまえば，当然 West などは外に出るであろう。